

期待される国語科教師像

— 免許皆伝のその先 —



香川県中学校教育研究会
国語教育研究部会長
大 林 克 暢

教員免許を取得したら授業ができるわけではないこと、採用試験に合格したからといってすぐにいい授業ができるわけではないこと、去年うまくいった単元だから今年もうまくいくわけではないこと、1組でうまくいった発問なら2組でもうまくいくわけではないことは、教壇に立てば誰もが思い知らされることである。答えを与えることを商売にしているのなら相手が誰でも同じ答えを与えるが、教師はそうではないからだ。すべての生徒と自分自身が納得のいく授業となれば、永遠に完成はないかもしれない。これが、我々の仕事が「崇高な使命」とされる理由の1つでもある。

もし教師が「教えられていないことはできない」と居直るならば、劇的な変革をこれから何度も経験する人間を育てることなどできるはずもない。世の中が作業と意思決定にますます分解されていく中で、「教材ごとのマニュアルが欲しい」というようなコストパフォーマンス重視の姿勢は、教師の仕事を意思決定のない作業だと言っているようなものであり、自身がAIに取って代わられることを歓迎するという喜劇にしか見えない。

近年、人間が学ぶとはどういうことか、その中で教師はどのような役割を果たすべきかといったことについて一層社会の関心が高まっているが、教師に求められているのは、膨大な知識を記憶して迅速かつ正確に再現するというAIに代替されるような役割ではないはずだ。教師は、社会に出てからも学ぶことで自分を変え続けるという生々しい人間の姿で生徒の前に立つことを期待されているに違いない。そんなに難しく考えなくても、「そもそも、どうして生徒と関わる仕事に就いたのか」という問いの中に答えはある。反証として、例えば「日々の授業で使えます」と宣伝されるいわゆる「赤刷り教科書」と呼ばれるものは臨時免許で授業をする先生のためにあるのもあって、教科の免許を持った中学校教員が教室に持ち込むものではないと言いたい。中学生は授業者の手元を見てしっかり値踏みしてくるからだ。授業者として生徒の前に立つからには、何はなくとも、教科の免許を持って授業をする専門職としての矜持がなければならない。

その矜持は、香川の子どもの学力を支えると評された「勤勉な教員文化」として現れる。勤勉とは、自ら学び続ける姿勢に他ならない。例えば、国語科教師らしく本を読む。大村はま、大西忠治、倉沢栄吉、野地潤家など、先達の著書から受ける刺激はいつまでも大きい。また、研究授業をやることに積極的に手を挙げて、志を同じくする仲間と切磋琢磨するという学びもある。読書と研究を楽しむ国語科教師を望まない生徒は一人もいないだろう。

終わりのない深淵な国語科教育の世界で、学び続ける覚悟を決めた時こそが、国語科教師の免許皆伝の時である。生徒が期待して見つめるのは、免許皆伝のその先で、なお前を向いて修行をやめない生身の我々だ。